



# 片倉もところ記念沙漠文化財団 ニューズレター

2016.6 No.3



1982年カタール・ドーハ  
(片倉もところ撮影)

## ● もくじ

- P 2 …… 「片倉もところ記念沙漠文化財団 2016年助成事業（一般活動・若手研究）」  
公募開始のお知らせ
- P3-4 … 一般活動助成の事前実施と報告  
東京外国語大学シリア研究会写真展報告 青木優奈
- P4-5 … アラムコ・片倉沙漠文化協賛金 縄田浩志  
サウジアラビア、キング・ファイサル・センターを訪問して
- P6-7 … アラビアの書と万葉集 佐川信子
- P 8 …… クウェイト・テレビ局制作「真珠取り」ドキュメンタリー 牛木久雄  
“Ghaws Al-Raddah” —そのビデオ CD 入手の経緯—
- P 9 …… 「イランの絵本展 Vol.3」～詩にまつわる絵本たち～ 愛甲恵子
- P10-11… 本の紹介／後藤晃編『オアシス社会 50年の軌跡』 原 隆一  
—イラン農村、遊牧そして都市—
- P12-13…片倉もところアルバム／沙漠の文化「もたない文化」 河田尚子
- P14-15…沙漠の写真館／「景観」
- P16…… 研究員の着任・お知らせ

# 「片倉もとこ記念沙漠文化財団 2016年助成事業 (一般活動・若手研究)」公募開始のお知らせ

このたび当財団では、「沙漠文化を大切に」「沙漠そのもののうつくしさをひきだす」ことにより、沙漠文化の「諒解」に寄与するという当財団の目的を理解し、当財団の目的を踏まえて展開される調査・学際的研究活動や、さまざまな文化的な活動に対して助成を行うことといたしました。皆さまのご応募をお待ちしております。

## 1. 一般活動助成

- 募集件数：** 当財団事業年度（2016年10月1日～2017年9月30日）内に、最大3件
- 募集期間：** 事業年度内に3回の審査を実施いたします。各審査会前の締め切りは以下の通りです。  
(第1回) 2016年10月31日17時必着  
(第2回) 2017年2月28日17時必着  
(第3回) 2017年6月30日17時必着
- 選考時期：** 書類選考は、事業年度内3回（11月、3月、7月）を予定しています。
- 助成額：** 1件につき最大15万円
- 助成対象期間：** 原則、助成金交付から1年間とします。
- 応募資格：** 国籍、所属、居住地などによる制限はありません。ただし、十分な日本語能力を有することが条件となります。
- 応募方法：** 本財団HP (<http://moko-f.com/>) より申請様式をダウンロードし、必要事項を記入の上、E-mailにて事務局宛 ([josei@moko-f.com](mailto:josei@moko-f.com)) に送信してください。メールの件名は「【一般活動助成】団体名もしくは申請者名」としてください。
- その他：** 詳細については、Webページに掲載されている「募集要項」および「申請書記入上の注意」をご確認ください。

## 2. 若手研究助成

- 公募件数：** 1件
- 募集期間：** 2016年7月1日～2016年7月31日17時必着。
- 選考時期：** 2016年9月末を予定
- 助成額：** 1件につき最大50万円
- 助成対象期間：** 原則1年間（2016年11月1日～2017年10月31日、2017年11月30日報告書提出）とします。但し、計2年を上限として継続・延長も可とします。その際にはあらかじめ審査します。
- 応募資格：** 沙漠の研究を志す大学院生、若手研究者（39歳以下）  
審査委員会において、研究歴などから大学院生・若手研究者相当と見なすことが妥当と判断される者は40歳以上であっても、助成の対象とします。応募者の国籍、所属、居住地などによる制限はありません。ただし、十分な日本語能力を有することが条件となります。
- 応募方法：** 本財団HP (<http://moko-f.com/>) より申請様式をダウンロードし、必要事項を記入の上、E-mailにて事務局宛 ([josei@moko-f.com](mailto:josei@moko-f.com)) に送信してください。メールの件名は「【若手研究助成】申請者名」としてください。
- その他：** 詳細については、Webページに掲載されている「募集要項」および「申請書記入上の注意」をご確認ください。

<申請書送付先・お問い合わせ先>

〒151-0063 渋谷区富ヶ谷 2-21-1-610

片倉もとこ記念沙漠文化財団 事務局宛

メールアドレス [josei@moko-f.com](mailto:josei@moko-f.com)

# 一般活動助成の事前実施と報告

沙漠から遠く離れた日本で暮らす私たちにとって、メディアで取り上げられる風景こそが、沙漠の風景といっても過言ではありません。しかし、メディアで注目されるのは、ある意味「よそゆき」の沙漠の姿であり、私たちの知らない沙漠文化も、世界にはたくさんあります。沙漠でたくましく生きる人々の姿、彼らがもつ美しい文化を、もっと知ってもらいたい！ そんな思いから、当財団では、沙漠文化を広く一般に向けて発信する活動を行う団体の活動を、助成という形でお手伝いさせていただくことになりました。

秋に始まる一般活動の公募に先立ち、東京外国語大学シリア研究会による写真展企画を対象として、試験的に活動助成を行いました。財団としての広報のあり方など課題も見えてまいりましたが、2日間の開催期間中多くの方にご来場いただき、何よりも素晴らしい展示会となりました。

## 東京外国語大学シリア研究会 写真展報告

2012年春、ダマスカス大学日本語学科の授業が危機に瀕しているとの情報を朝日新聞が報じた。これをうけ、東京外国語大学アラビア語専攻の有志がダマスカス大学の学生との語学交流を模索し始めたのがシリア研究会の始まりである。現在は42名で東京外国語大学を拠点に、学生ならではの目線で活動を展開している。

活動の中心として、ダマスカス大学やアレppo大学、ダマスカス郊外の小学校で日本語を学ぶ学生らと交流してきたが、中でも東京外国語大学の協定校であるダマスカス大学とは密な交流が続いている。彼らとはSkypeを通じ、趣味や将来の夢、今後のシリアや日本の未来などありとあらゆるテーマで議論を重ねてきた。内戦下にも関わらず、情熱をもって勉学に励む同年代のシリア人青年の姿は、私たちにいつも大切なことを気づかせてくれた。それは、彼らはシリアに生きながら、平和な日常を取り戻すために「それぞれの人生において」戦っているということだ。シリアに関連するニュースとして度々、「テロ」「イスラム過激派」「空爆」について取りざたされるも、そこに生きながらえている一人一人のちっぽけな、しかしかけがえのない命について取り上げられることはほとんどない。内戦やテロの恐ろしさが先行するあまり、ともすれば忘れられがちな、シリアに生きる人々の存在が伝わるような広報活動を目指



し、これまで都内私立中学・高校での出張共同勉強会、東京外国語大学学園祭でのシリアブースの出展、シリア最新情勢に関する講演会なども行ってきた。

そのような中で、特に今回の写真展は、シリアのありように対する理解の促進を目的とし、シリアの美しい風景や「ひと」の生きる姿を視覚的に伝えるという、当団体としても初の試みであった。

ここからは4月23日（土）、24日（日）に東京・原宿のデザインフェスタギャラリーで開催した写真展の展示内容、企画構成、関連企画、来場者アンケートについて報告する。

まず、写真展の展示内容としては、シリア在住のダマスカス大学日本語学科の学生が撮影した写真をメインに、アレppo大学で日本語学習中の学生が撮影した写真や、シリア郊外の小学校で日本語や日本文化に親しむ活動を行っている「オタククラブ」の子供たちの写真、それぞれがアラビア語、日本語で好きな言葉を書くシェアマイハートアクションの写真計56枚となった。A1版からはがきサイズまで大小様々な大きさで写真を展示し、メインメッセージとなる写真には英訳も併せてキャプションを付した。

展示構成については、4壁面のうち、3壁面を使用し、一番目の壁面には内戦前と内戦開始後のシリアの美しい街並みや風景を展示し、内戦中といえどもシリアの美しさがまだ残っている部分もあると感じてもらおうと同時に、現在のシリアにも、シリアを愛し、そこで日常を過ごす人々がいるのだということを訴えた。二番目の壁面にはシリア現地の友人が思い思いの好きな言葉を掲げている写真と、彼らが日本語を勉強する姿を写した写真を展示し、シリアの若者の奮闘する姿を伝えた。三番目の壁面ではシリア研究会とシリア現地の学生が交流している写真を展示し、平和な未来の実現のため、今後も日本とシリアの絆を絶やさぬようにすることの重要性を訴えかけた。

## 東京外国語大学シリア研究会 写真展報告

また、関連企画として本学シリア出身留学生のエネザン・バラさんと当団体副代表による対談形式で、シリアの現状に対する思いや、日本とシリアのつながりを今後も守り育てる決意などを語ったトークイベントを二回にわたって開催した。写真提供者のシリア人青年による、南シリアで避難民化した子供たちの教育や心のケアといった活動を支援するため募金箱を設置したほか、写真展に展示した写真のうち、3種類をポストカードとして1枚150円で販売し、こちらも同様に売り上げは南シリアの教育支援活動に全額寄付した。来場者は2日間で400人超、来場者層で最も多かったのは一般・社会人の方で約6割を占めた。朝日新聞、NHK国際放送アラビア語局の番組にも取り上げられ、当初予定していたよりも多くの方にご来場いただき、影響力のある展覧会にすることができた。来場者の中にはもともとシリアに渡航経験があったり、中東研究に携わる方々も多かったが、まったくシリアや中東に関心がない層にも展示を見てもらうことができ、普段の活動ではなかなか



取り込むことができなかった層にシリアの美しさやそこに生きる人々の存在を伝えることができたのは大きな収穫であった。

最後に、このような写真展を開くことになった背景と開催の意義をまとめて結びとしたい。

シリアでは紛争の長期化に伴い、学生たちが日本語を勉強する環境はますます困難になり、学生たちの多くが親類や近親者の誰かを亡くしたり、生家を破壊されたり、空爆で友人を失ったりと、深い心の傷を負ってきた。それでも彼らは日本語を話すとき、笑顔を絶やすことはなく、苦しくとも日本語の勉強をやめようとはしなかった。彼らにとって日本や日本語について学ぶことはそれほど大きな意味を持っていたのだと思われる。私たちも、彼らの心の支えになるような活動ができないものかとずっと模索し続けてきた。

そのようななかで、今回開催することができたこの写真展は、シリアと日本のきずなを再強化させ、私たち日本人学生にとって、シリア人学生にとって、そしてまた、日本とシリアの平和な未来にとって、きわめて重要な意味を持つものとなった。

改めてこの場をお借りして、故片倉もとこ先生をはじめとする諸先生方が築き上げてこられた中東と日本の温かな繋がりを祝福するとともに、当団体の活動理念、企画趣旨にご理解ご協力いただいた御財団に厚く御礼申し上げます。(文：シリア研究会副代表、青木優奈)

シリア研究会 HP <http://tufsyria.wix.com/jssso>

古書・古文書のうち1100は貴重本である。また「現代政治思想研究」「近代研究」「マグリブ研究」「イラン研究」「サウジ研究」「アラビア語研究」という6つの研究ユニットから構成され、52カ国から240人の外国人研究者を受け入れてきた実績がある(詳細はウェブサイトを参照：<http://www.kff.com/en/King-Faisal-Center-for-Research-Islamic-Studies>)。

サウード・アルサルハン研究部長(Dr. Saud Saleh Al-Sarhan, Director of Research)と研究部の女性研究員2名にお会いし、当財団の資料・ニューズレター、2015年のサウジアラビア、ワーディ・ファーティマ訪問の英文報告書、片倉もとこによるワーディ・ファーティマにおける現地調査に基づく著作『Bedouin Village』の英語・アラビア語版、そしてサウジアラビアのレイダ自然保護区周辺において私自身が行った現地調査結果を含む英語・アラビア語の『Exploitation and Conservation of Middle East Tree Resources in the Oil Era』等の著書3冊を謹呈した。

英語・アラビア語の出版物として研究成果をまとめていくことについて、大きな期待を示していただき、お渡しした資料・著作物はすぐプリンセス・マハに報告するということがあった。当財団とは今後も協力関係を持っていきたいので、一般的な覚書の締結の必要性を示唆された。その上で調査研究の受け入れは広く対応可能であり、例えば人類学を専門とする研究員らとの打ち合わせを持っていく方向性が示された。さらに具体的にはワーディ・ファーティマ等リヤド以外の現地調査の可能性については、政府系組

織との連携を条件として、サポートしていただけるということであった。

続いて、ラシャ文化部長(Ms Rasha E. Ajam, Head of Cultural Events)により、センター内の収集所蔵品を案内、解説いただいた。1階の展示スペース正面では、カバ神殿の鍵が訪問者を迎えてくれる。そして銅版に刻印されているクルアーン(縦50cm程)、最少のクルアーン(縦4cm程)、そして私が個人的に最も惹きつけられたのは銀製の10cm程の筒に入れてヒジャーブ(お守り)として身につけるといふ巻物のクルアーンであった。一枚紙に書かれており、その文字の小ささといったら!日本の「米粒写経」を思い出した。

2階の書庫にはアラビア語を中心とした多くの収集書籍が保管されており、損傷のレベルに応じて分類、収納されていた。例えば、貴重本の一つ、ナポレオン『エジプト誌』原版を見せていただいた。ちょうどエジプトのクセイル港のページを開いていただいたので、港の街並み、船の様子、ナツメヤシなどすばらしい細密画に目を見張った。10年程前にはエジプト、カイロの沙漠研究所の図書館で同じく原版を見せていただいたことがあったことや、また学生の時に日本の中近東文化センターでリプリント版『エジプト誌』をはじめたときの感動も思い起こした。

古書の保存修復を行う部署にも案内いただいた。虫食い、色あせ、ページ散在等の状況にある古書を、零下30度で虫を殺した後に、日本の和紙を利用して一枚一枚を補修していた。スーダン人の主任技術者の下、数人が作業に集中していた。紙資料の保存、修理、補修といった文化財保存修復の分野で日本が培ってきた技術や経験が活かされていることのすばらしさに、あらためて気づかされた。

訪問を終えて、一番感銘を受けたことの一つは、女性スタッフが活躍していることであった。研究部長のサウードさんは男性であるが、他お会いして対応して下さった3名の方はすべて女性であった。それも英語は堪能、対応も非常に洗練していた。私のこれまでのサウジアラビアにおける経験では、医療・教育関係など限られたところ以外では、女性に対応いただいたことがほとんどなかったもので、正直若干どぎまぎしてしまう程であった。

キング・ファイサル・センターは、本財団の設立趣旨を理解いただき、活動の方向性をサポートいただくのに、最も相応しい高等学術機関の一つであった。今後は関係を深めつつ、多くの可能性の芽を大事にしていくことが重要であると感じた。(文：縄田浩志)



キング・ファイサル・センター入口

## アラムコ・片倉沙漠文化協賛金 サウジアラビア、キング・ファイサル・センターを訪問して 縄田浩志

2016年3月、当財団との今後の包括的な連携の可能性を議論、検討するために、サウジアラビアの高等学術機関キング・ファイサル・センター(King Faisal Center for Research and Islamic Studies:「学術調査とイスラーム研究を目的とするキング・ファイサル・センター」)を訪問した。首都リヤドのランド・マーク的なタワー「ファイサリヤ」の一角に位置している。

キング・ファイサル・センターは、キング・ファイサル財団によって1983年に設立された学術機関で、非政府系では一番の蔵書数を誇る図書室を持ち、16000を超える

### 調査日程

- 3月16日 羽田→ドーハ→リヤド
- 3月16日~3月24日 リヤド
  - キング・ファイサル・センター訪問
  - アブドゥルラヒーム氏、ハナーン氏宅訪問
  - 日本大使館表敬
  - サウジ野生生物保護庁訪問
- 3月25日~27日 ジェッダ
  - PERSGA訪問、関連資料購入
- 3月28日 ジェッダ→ドーハ
- 3月29日 ドーハ→羽田

佐川信子

美しい文字を書く技術は世界中にあります。なかでも美術の域に達するものとしては中国や日本の書道と、イスラーム世界のアラビア語カリグラフィーが双璧をなしています。カリグラフィーということばはギリシア語の「美しい」(kallos)と「書く」(graphein)からできていますが、ただ美しく書けばいいというものではなく、なにを書くか、社会に向けてどのようなメッセージであるのか、文字を書くためにどのような紙、インク、ペンを使うかなど、あらゆることに気を配り、修練を重ねてきた歴史が背景にあるのです。アラビア語に「ファンヌ アルハットゥルアラビー Fann Alkhat Alarabii」ということばがあって、訳せば「アラビアの書の技芸」という意味になります。これにはイス

ラームの人々の文字の美に対する思いと、そこから展開するイスラーム美術の拡がりへの誇りが感じられます。

イスラームの聖典『クルアーン』の編纂は七世紀半ばにはじまり、それが人々の手によって書き写され、多くの都市に広がっていきました。この聖なることばを書き写すために人々は美しい書法を生みだそうと試み、さまざまな技法や幾何学的なシステムを作り出してきました。偶像崇拝を避けるために文字のかたちそのものに思いをこめ、さまざまな書体が生まれました。ただ音と意味を伝える文字ではなく、そこに神のことばを表そうとしたのです。やがて中国から紙の製法が伝わると、文字の美にたいする追求は大きく拍車をかけられました。



聖クルアーン、イムラーン家章 104 節



イスラームの書芸では、竹軸を斜めにカットしたペンを用い、つねに紙面に密着させた状態で文字を書きます。毛筆の書では、紙面にたいする圧力を変化させて太さや濃淡を変化させていきますが、イスラームの書では、ペン先の角度や方向を微妙に調整することで線のニュアンスを出していきます。にじみやかすれ、墨のしたたりといった偶然性に頼ることなく、きわめて厳密な線の美を求めるところが東洋の書と違った魅力だといえるでしょう。

現代に書かれている書体は六種類ほどになりますが、それぞれに厳格な規定があって、美しい字体のかたちが定められています。しかしそこでも書家それぞれの個性が生まれてきます。たとえば私は一人のアラビア・カリグラフィー書家として、『クルアーン』の章句と日本語の訳を重ね合わせたり、日本の詩句とアラビア語の訳を重ね合わせたりする試みをしてきました。ごく短い詩句をアラビア語に訳してみると、不思議な響き合いを感じ、自然への向きあいに通じるものを見つけることができました。

そこで思い出したのが『万葉集』です。高校生のころ『万葉集』に出会い、斎藤茂吉の『萬葉秀歌』(岩波新書)を読みふけたものです。やがて大学で奈良や吉野のフィールドワークに参加し、万葉の心を感じることもできました。

春の野に 董摘みにと 来しわれそ  
野をなつかしみ 一夜寝にける

山部赤人

何首かアラビア語に訳してみても、とりわけこの一首は「野」を「砂漠」に、「董」を「星」に読み替えたりしなくても、「砂漠でキャンプして星空の下で眠るのが大好き」というアラブの友人たちの共感を得るだろうと思えたのです。

この歌の解釈を見てみると、「本来董を摘むというのは、可憐な花を愛するためでなく、その他の若草とともに食用として摘んだものである」とあり、シリア留学中に、ダマスカス郊外にある果樹園にりんご狩りに行った日のことを、ふいに思い出しました。レバノン山脈から流れ来る豊かな清水のおかげで、ダマスカスは季節ごとの果物が豊富なところだったのです。樹からもぎとったりりんごは手のひらに包みこめそうなほど小ぶり、堅くしまった実は愛らしい薄めの紅色をしていました。

万葉集の歌をアラビア語で書くときには、透明感のある色インクを使おうと決めていました。果樹園に遊ぶような、心地よい状景。文字ひとつにこめたさまざまな思いが伝わりますように。(文:アラビア書芸家、佐川信子)

# クウェイト・テレビ局制作「真珠取り」ドキュメンタリー “Ghaws Al-Raddah” —そのビデオCD入手の経緯— 牛木久雄

片倉もとこ記念沙漠文化財団が設立された時、沙漠文化資料として貴重なものがあれば、国内国外を問わず積極的に収集しようということが決った。ご存知のように、もとこさんは、湾岸地域（ガルフ）の真珠漁業とアラブの海洋活動に強い関心を持たれ、幾つかの論考も書かれている。私も、アラブの海洋活動には、以前から関心があり、雑駁だがあれこれ情報も集めていた。その中に、1975年にクウェイトで見た真珠採りのテレビ番組があった。何しろ40年も昔のことなので記憶も危うくなっていたが、もし、今でも映像源があるのなら、沙漠文化財団の資料のひとつに加えたいと思った。

私はその番組を見たのは、当時クウェイト科学研究所（KISR）で養殖の研究開発に携わっておられた池ノ上宏さんをお訪ねした時であった。私は、その年の春、パキスタンからイランにかけて、海岸沿いに地学踏査をつづけ、クウェイトにたどり着いた。実は、同じような踏査は、1971年と1973年にも行っており、1973年には在クウェイト日本大使館のご厚意で、当時開設して間がないクウェイト科学研究所を訪問する幸運にも恵まれていた。1973年のKISR訪問では、事務長の田井中勝次さんが研究所を隅々まで案内してくださり、KISRには日本の養殖専門家が強力な活動を展開している様子も見せて下さった。しかし、1973年の訪問では、中心メンバーの池ノ上さんがイランに出張中だったので、残念ながらお会いできなかった。1975年のクウェイト訪問で、池ノ上さんに初めてお会いし、真珠取りのテレビ番組をビデオで見せて頂いた。そのテレビ番組は、小さな帆船に乗った素潜りの男たちが、鯨を恐れながら海底で真珠貝を漁するというものであった。池ノ上さんとは、以来長くお付き合い頂いている。ガルフが単なる産油地ではなく、漁業も長い伝統があり、豊かな漁業資源に恵まれていることを実感したのは、これらの踏査旅行を通してであった。

ガルフの真珠取りドキュメンタリー映像としては、クウェイトで見たテレビ番組が最上だと直感したので、先ず池ノ上さんに私の記憶を確かめてもらった。彼も忘れていたようだったが、あのテレビ番組はドラマ仕立てのセミドキュメンタリーだったのではないかとのことであった。どのようにして映像源を探し出そうかということになったが、幸い池ノ上さんの同僚だった赤津澄人さんがKISRに勤務していたので、先ず赤津さんに頼んで、40年前を知るクウェイト人達に聞いてもらうことにした。赤津

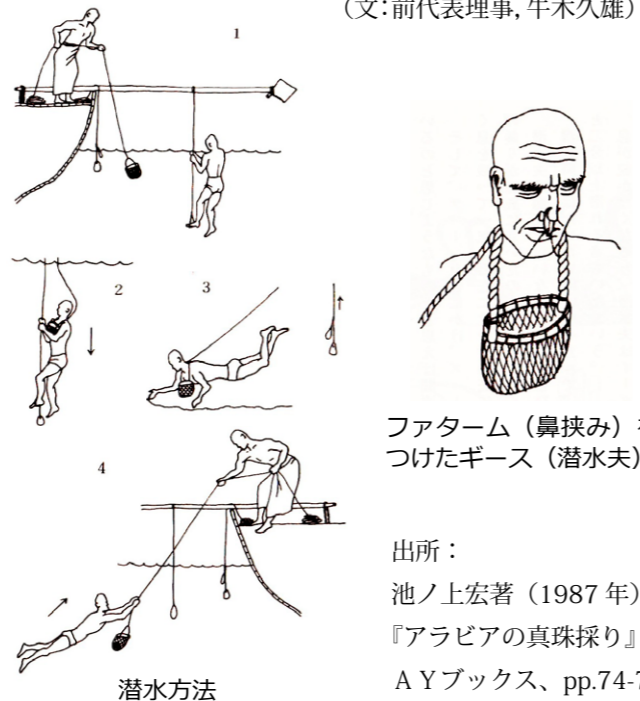
さんとは2014年5月に連絡が取れ、映像源探しを快諾して頂いた。しかし、クウェイトは、1990年のイラクによる進攻で、多くの文化財を失っており、テレビ番組の録画資料などは見つけ出せないだろうということであった。それから1カ月して、赤津さんからその番組の録画CDが送られてきた。KISRの同僚Sleiman Al-Attarさんが番組録画を見つけてくれたそうで、それをCDにしてくれたようであった。CDには、2本の映像が収められており、どうも連続ものだったらしい。アラビア語字幕から判断すると、クウェイト建国10周年（1971年）記念の作品だったことが分かった。表題は「Ghaws Al-Raddah ガウス・アッラダ」で、真珠漁の漁期区分のうち最終漁期（もどり漁：池ノ上宏著「アラビアの真珠採り」、1987）を指すようである。監督・シナリオがHashem Muhammad、監修がDr.Yusuf Dukhiとあり、前編が1時間、後編が30分録画されていた。

このCDは、番組放映時に磁気テープ録画したもので取り込んだらしく、画像の解像度はあまりよくない。また、音声の出る部分もあるが完全ではなかった。

赤津さんの努力で、2015年1月に、クウェイト・テレビの現役メンバーの1人の連絡先が伝えられた。

クウェイト・テレビとの連絡がとれて、片倉もとこ記念沙漠文化財団との協力関係が実現すれば、新しい展開が始まるかもしれない。今後の成果を期待したい。

（文：前代表理事、牛木久雄）



# 催しもののお知らせ 「イランの絵本展 Vol.3」～詩にまつわる絵本たち～ 愛甲恵子

イランの絵本やイラストレーターを紹介する二人組のユニット、サラーム・サラームは2004年に活動を始め、これまでに40回以上、全国様々な場所で展覧会を企画してきました。内容を大別すると、イラストレーターの原画を楽しめる個展と、多様な絵本を日本語のあらすじ・抄訳とともに並べる、絵本中心の展覧会。当然のことながら、開催する時と場所によって並べる絵や絵本の種類は異なり、そのことがそれぞれの展覧会に個性を与えてきました。今回ご案内するのは、東京・成増のカフェギャラリー Patina で3度目となる絵本展で、サラーム・サラーム史上初めて、詩に関する絵本だけを並べる展覧会です。

イランは、あまたの詩人を輩出してきた「詩の国」。絵本という表現ジャンルにおいてもその存在感は抜群です。日常や四季の風景を簡単な言葉とリズムで表現し、それに絵を添えた「詩絵本」の多さや、フェルドゥスィーの『王書』、ルーミーの『精神的マサナヴィー』など、有名な古典詩をやさしい散文にして絵をつけた絵本が今なお続々と刊行されていることを見てもそれは明らかです。また、新しく作られた散文の物語であっても、詩的なイメージにあふれた非日常の世界を描く方が得意であり、絵についても、物語を忠実に再現することに大きな価値はおかれず、そのお話がどう個性豊かに表現されているかが評価の鍵となっています。ここにも詩の影響がありそうです。

このように詩の存在が色濃く感じられるイランの絵本ですが、それを日本語で味わい、楽しんでもらうとなると、その翻訳には散文作品とは違った難しさがあります。それは「音」の問題です。韻文作品を翻訳する時には必ず問題になることですが、押韻だけでなく、子音や母音を巧みに配置することによって心地よい音の連なりを作っていくペルシア語の詩は、「音」自体も「意味」に含まれると言っても過言ではありません。もちろん厳密に言えば散文作品もそうですが、ペルシア語の詩が基本的に声に出して楽しまれてきたものであることを考えると、詩における「音」の問題はとて大きいのです。翻訳者は、日本語にすると失われる音の連なりを意識しながら、読み手に伝わる言葉の一つ一つを探していくことになります。要は、時間がかかるわけです……あ、なんだか言い訳めいてしまいましたが、つまるところ今回の展覧会は、サラーム・サラームの翻訳係（筆者）の怠惰によりこれまで十分に紹介されなかった詩の絵本を一挙にご紹介し、その豊かな世界に触れていただこうというものなのです。



展示する予定の詩絵本

会場には上述のような詩絵本や古典詩を散文化した絵本をはじめ、詩人が散文の物語を書いた絵本、詩人自身がモチーフになっている絵本など、とにかく詩に関する絵本だけを30冊程度並べる予定です。また壁にはルーミーの「オウムと商人」をモチーフに描かれた絵やイランの若手詩人の絵などを展示します。絵本と詩の様々な関係をお楽しみください。

なお、本展は毎年夏に板橋区立美術館で開かれるポローニャ国際絵本原画展（今年は7月2日～8月14日）に合わせて企画されたものです。この原画展には毎年のようにイラン人イラストレーターが入选しており、今年も5名の作品が選ばれました。ポローニャ展を観た後、Patinaでお茶を飲みながらイランの絵本をじっくり味わう、というのはいかがでしょうか。（文：愛甲恵子）



会期中はイラン料理を取り入れたランチが食べられます。これは昨年の、ラムとセロリがたっぷり入ったシチューのランチ。

日時：7月4日（月）～18日（月・祝）  
11:30-19:00 \* 7月6日、7日、13日休み  
場所：Cafe & Gallery Patina  
東京都板橋区成増 3-20-16-101  
Tel：03-6909-9524  
URL：http://cafepatina.wix.com/rabbit  
企画：サラーム・サラーム http://salamx2.com

# 本の紹介

## 後藤晃編『オアシス社会 50年の軌跡

### - イランの農村、遊牧そして都市 -

原 隆一

この本は、イランのひとつの地方を対象に村社会と地域経済についての40年以上にわたり観察し調査をおこなった研究報告であり記録である。

経済学、社会学、歴史学、文化人類学と、それぞれ専門を異にするわれわれのグループは、このオアシスの村に住み込み、近隣の都市から通い、ある時は共同で、また、それぞれが独自に調査を続けてきた。これをつなげてみたら半世紀近くの歳月が流れていた。

そもそも、日本人研究者のマルヴダシュト地方との関わりは、江上波夫氏を団長とする1958年の東大イラン・イラク考古学遺跡調査にはじまる。この縁で、1964年に東大東洋文化研究所の大野盛雄先生が遺跡近くの村で人文地理学的調査を行ったことによる（『ペルシアの農村 - 村の実態調査 -』東京大学出版会、1971年5月、総400頁）。

その後、1972年から1975年にかけて、大野を研究代表者とする「西アジア農村の人文地理学的調査」（科研費）が生まれ、マルヴダシュト地方の2つの村、ヘイラーバード村とポレノウ村での半年以上にわたる住み込み調査が行われた（本書の執筆者である後藤 晃、南里浩子が参加）。

1970年代後半からは、1979年のイラン・イスラム革命をはさみ、この研究を引きつぐかたちで大野、後藤、南里、原 隆一、ケイワン・アブドリらの専門領域の異なる個人やグループによって断続的に調査が続けられた。そして、2004年から2007年にかけて、原を研究代表者とする現地調査（「イラン・ザールグロス山地コル川流域地方の40年の社会変容」（科研費））が実施された。

この本は、1964年の大野先生にはじまるイラン南部にある村での日本人による先駆的フィールドワークの記録資料を踏まえ、調査研究を発展したものである。その時からすでに半世紀以上の時間が流れた。

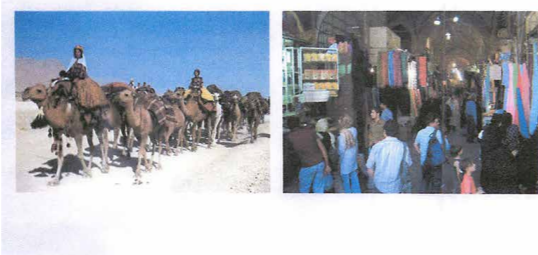
調査対象となったマルヴダシュト地方は、イランの首都テヘランから南へ約800キロメートル、トルコ東部からイラク国境にそってペルシア湾の東に延びるザールグロス山中にある大きな谷平野である。中央部には、高山の雪解け水に源を発する内陸河川コル川が流れている。河川灌漑のほかに、山麓傾斜地には地下水利用の湧水、カナート、畜力井戸、それに近年ではポンプ井戸など複数の灌漑施設をもった農業地帯であり、200以上の村を抱えたイラン有数のオアシスである。



## オアシス社会50年の軌跡

イランの農村、遊牧 そして都市

後藤 晃 編



ここはまた、ザールグロス山間部を春と秋の年2回、草地を求めてヤギ、ヒツジなどの小家畜群を求めて移動するトルコ系、イラン系、アラブ系など多くの遊牧民の通過ルートでもあった。そのため、この地には遊牧民定着の村が多い。

この40年以上の間に、マルヴダシュト地方の村社会は、1962年にはじまる農地改革、1970年代のオイルマネーを背景としたシャー（パフラヴィー国王）の白色革命（親米近代化路線）と開発独裁、1979年のイラン・イスラム革命、そして、1980年から1988年まで続くイラン・イラク戦争と、国を、そして世界を揺るがすような政治経済事件の大きな渦に次々と巻き込まれていくことになる。

この本は、二部からなる。第一部は、近現代のイランの土地制度、土地政策の変遷のなかに調査対象地域と村を位置づけて論じた理論的、歴史的な記述部分である（第1章から第3章）。第二部は、われわれグループが40年余にわたるマルヴダシュト地方での現地調査を踏まえ、そこでの村社会と地域経済の大きな変容を跡づけたものである（第4章から第7章）。目次は次のとおりである。

### 第一部

第1章 地主制と村の農民

後藤 晃

第2章 農政の展開と農業社会

後藤 晃・原 隆一・ケイワン・アブドリ

第3章 大土地所有制の変遷

- 地主層の興亡からみたマルヴダシュトの100年 -  
ケイワン・アブドリ

### 第二部

第4章 遊牧民定住村の40年のあゆみ

南里浩子

第5章 農民経済の発展と市場経済

- マルヴダシュト地方の事例 -

後藤 晃

第6章 イラン革命とイスラム農地改革 -1978-1988-

原 隆一

第7章 マルヴダシュト地方の水利と社会

原 隆一・後藤 晃

この調査研究でとられた方法でなら目新しいものはない。ただし、次の2つの点を重視したつもりである。

ひとつは、比較研究の視点である。地域研究は他の地域との比較を前提とする。その際、自分たちがよって立つ日本人の視点（ひとつの文化フィルター）を意識した。風土が大きく異なり歴史と文化社会の構造が異なるイラン社会

を理解し、イラン社会をとおして日本社会を考えるスタンスが維持された。また、空間的にも同じような風土のアフガニタン、トルコなどとの比較調査研究も行ってきた。

ふたつめは、定点調査を長期間継続してきたことである。重心を低くし、村びとの生活者や生産者からの聞き取りと観察からの記録を長期に続けたことにある。今となつては、半世紀以上にわたる記録資料（写真、地図、フィールドノート）は、将来の歴史学者の重要な一次資料となることだろう。すでに、現地イランの村びとにとって、村びと自身が残していない村の歴史の貴重な記録資料となっている。

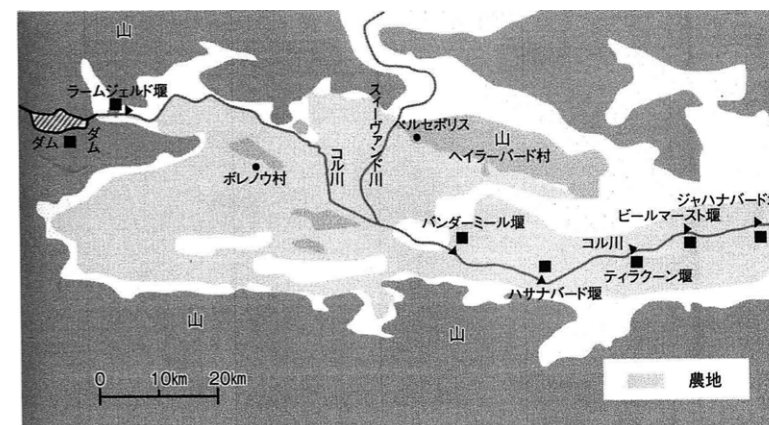
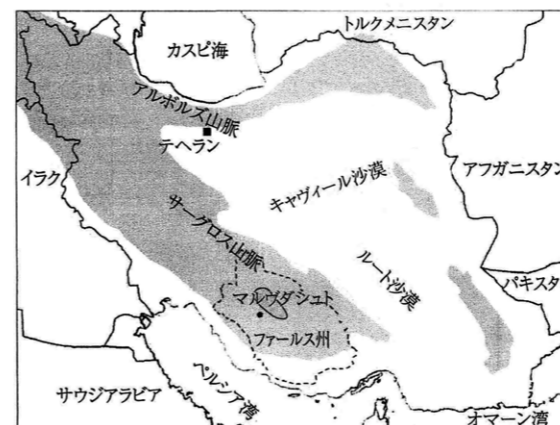
アラビア半島においても、1960年後半から70年初頭にかけて片倉もとこ先生がワーディ・ファーティマのオアシス村で行ったフィールドワークの貴重な記録とその成果が残されている。今、財団関係者を中心に、半世紀前の調査記録を踏まえたフォロー・アップ調査研究が組織され動きは始めている（『片倉もとこ記念沙漠文化財団ニューズレター第2号』（2015年12月）。

日本人の先駆的研究者の記録を再検討しながら、アフロ・アジアの沙漠ベルト上のアラブ圏、イラン圏、中国圏での沙漠文化の比較歴史的な調査研究ができれば面白いだろうと、今から、わくわくしているところである。

（文：原 隆一）

### 書誌情報

後藤晃編『オアシス社会 50年の軌跡 - イランの農村、遊牧、そして都市』御茶の水書房、2015年3月、総364頁



マルヴダシュト地方の全体図

〔出所〕 後藤晃編『オアシス社会 50年の軌跡 - イラン農村、遊牧そして都市』（お茶の水書房、2015年3月、pp. ii - iii、総364頁）

# 片倉もとこ アルバム

片倉もとこ  
所蔵、撮影の写真と  
それにまつわる思い出を  
紹介します

## 沙漠の文化 「もたない文化」

### 河田尚子

最近、若者の間で「ミニマリスト」という言葉が注目されているらしい。生活上のちもものをできるだけ減らし、本当に大切な最小限の「もの」しかもたないで暮らす人たちのことだ。大量生産、大量消費の現代に新しく生まれたライフスタイルだという。本屋に行くと、その種の本がたくさん並んでいるし、インターネットで「ミニマリスト」というキーワードを入れると、膨大な数のブログなどが検索できる。彼らの自宅の写真を見ると、確かにすっきりしたインテリア。中には、本当に室内に何も置いてない人もいる。テレビもテーブルも、ベッドもない。書類や本などはすべてパソコンにデータ化して入れ、フローリングの床の上にはソファとベッド兼用のマットレスとパソコンだけ。ある人は、必要なものはすべてバッグの中に入れて、災害などがあっても20秒もあれば避難できると豪語している。食器は自分の分だけ。友人を招くときは、近くのカフェへ行く。トイレトペーパーや洗剤などのストックも持たない。近所のコンビニやスーパーに行けばいつでも必要なものが手に入るから。「店にストックしてある」と考えるのだという。このようなライフスタイルは、2010年ごろから欧米にあらわれ、あっという間に日本でも広まったようだ。高度資本主義社会の中で、生まれた時から大量の「もの」に取り囲まれて育った世代の若者たちにとって、「もたない」ことは目新しい価値観なのだろう。

もとこ先生は、もっとずっと早く、1980年代から「もたない」価値観について注目してきた。エッセイ集『沙漠へ、のびやかに』の中に、「持つことと持たないこと」というエッセイが入っているが、2009年に出版された『やすむ元気 もたない勇氣』の中にも、第二章「もたない」勇氣をもつ、というタイトルで加筆されている。そこに描かれているのは、夜の沙漠で燃やすたぎぎの材料を取りに行くベドウィンの乙女たち。沙漠の夜は冷えるので、煙の出にくい「アフー」と呼ばれる木は必需品。それを集めるのは

女性たちの役目だという。まだ日差しのきつい昼間に、アフー集めにテントから100キロもトラクターを走らせて出かけていく。つるはしで、がっちり張ったアフーの根を掘り起こすのは重労働。前の晩、テントに来たお客さんのために、最後の一本までアフーを燃やしてしまったことが不満で、もとこ先生はついつぶやいてしまう。「少し貯めておけばいいのに！」それをきいてベドウィンの乙女たちはきょとんとする。「貯めるって？ここに貯まっているじゃない」それはアフーに限ったことではない。沙漠での生活に何よりも大切な水でさえ、大きな容器に貯めてはおかない。毎日、頭の上に水の入った缶を載せて、大事に井戸から運んでくる。「井戸の中に貯まっている」という考えをするのだという。

現代日本の「ミニマリスト」の「もたない」生活は、住まいの近くに膨大な量の品物売る店が多数あることを前提としており、どんなにものを減らしても、パソコンやスマホなどの情報機器は決して手放せない。彼らはやはり現代の大量生産、大量消費社会、最先端の情報社会の申し子なのだろう。それに対して、1960年代からもとこ先生が見つめ続けてきた沙漠の人々の「もたない」生活は、見渡すかぎりの荒野の中、店舗や品物はおろか、人影すら何百キロも車を走らせなければ出会えないところで営まれていた。パソコンやスマホも当時はもちろん存在していなかった。沙漠という、人間にとってもっとも過酷な自然環境の中でのもたない生活だ。しかしそれは、ただ過酷で厳しい、潤いのない生活というわけではない。アフーをたっぶり燃やして暖まった夜の沙漠では、詩を吟じ、歌い踊り、コーヒーを楽しみ、おしゃべりに花をさかす。疲れて眠りこんだ家具のほとんどないテントの中には、青い月の光が海の底のようにゆらめいている。そんな、心豊かな世界が広がっている。

アラビアの遊牧民は定着民を見下して、「ものをもちだ



夜の沙漠でくつろぐ  
1988年12月  
アラブ首長国連邦、ラクダ基地にて

したら、おしまい」などと言っていたという。遊牧生活をやめて定着した人々は、きまってひどくおどおどするようになる。持っているものを極度に大事にしようとする気持ちが、そうさせているのでは一と。

現代のミニマリストの人たちも口をそろえて、ものを減らすと人目を気にしなくなり、将来に対する不安が消えて、四季の移ろいに敏感になったり、ちょっとしたことに幸せを感じられるようになると主張している。

20世紀になってから、まだまだ足りない、もっともちなさい、というかけ声のもとに繰り広げられてきた大量消費社会の申し子たちがたどりついた先が、結局は沙漠の遊牧民たちと同じ「もたない」文化だったとは、何だか皮肉なことのような気がする。もとこ先生も「ほうらね」とおっしゃっているだろうか。

(文：河田尚子)

# 沙漠の写真館

テーマは「景観」

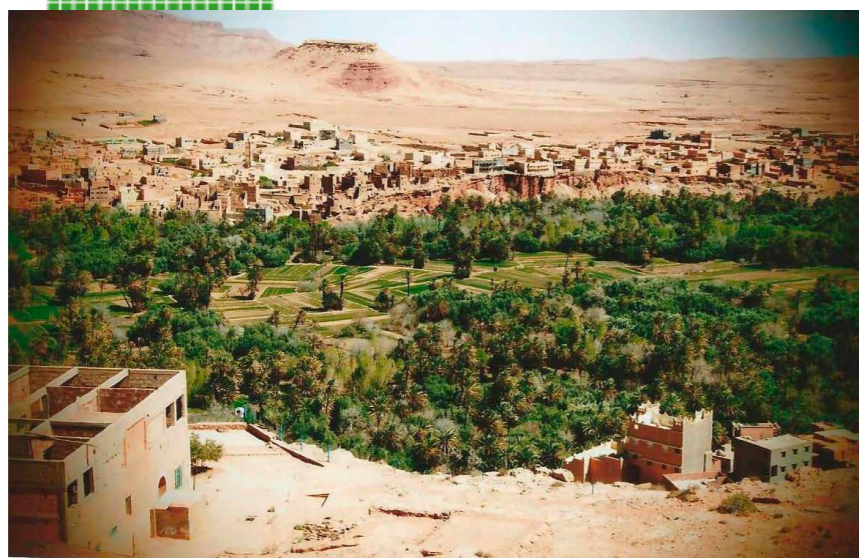
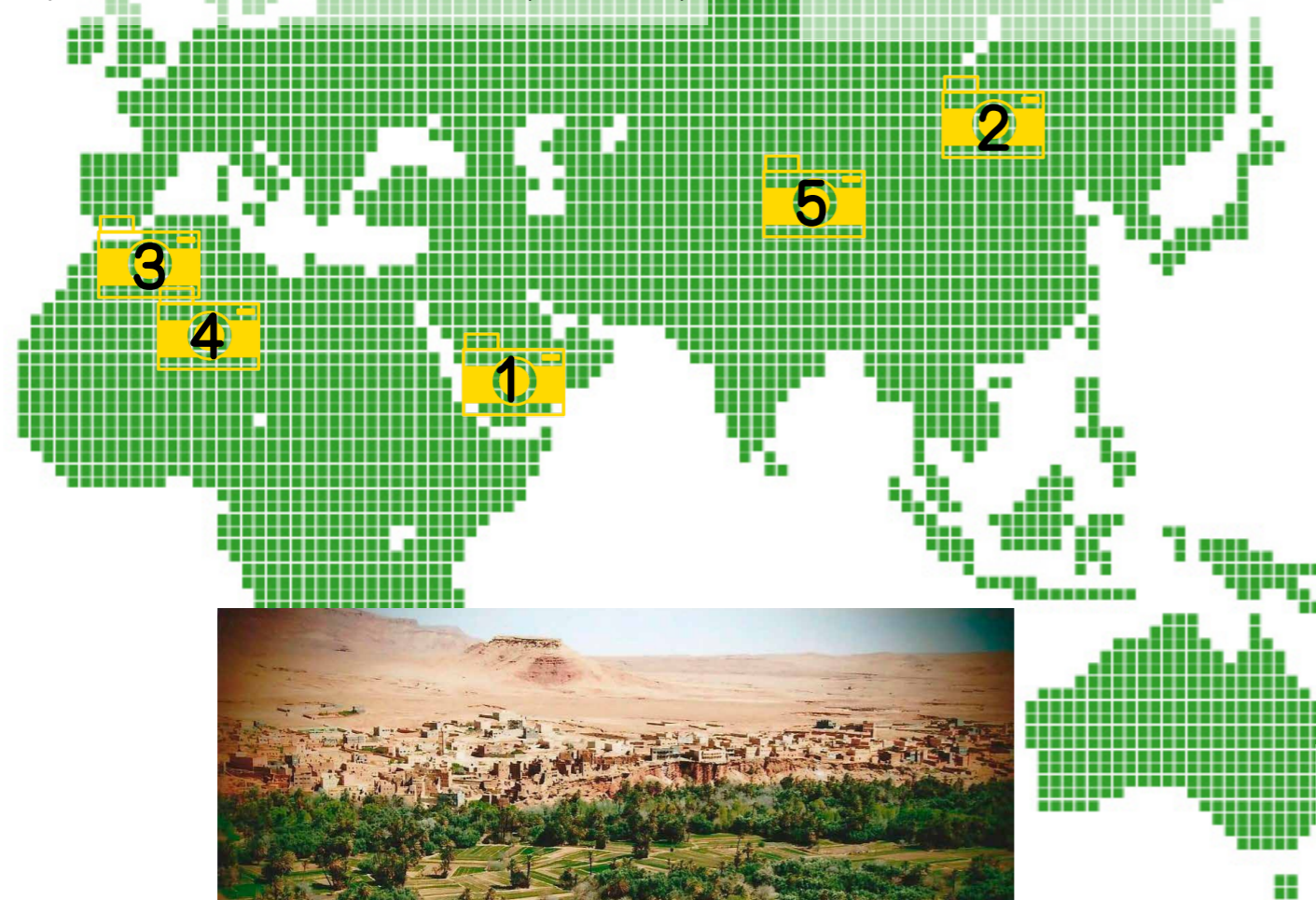
世界にひろがる沙漠の  
さまざまなコトを  
写真で紹介します



1 サウジアラビア、ナジュラン近郊のオアシス村  
小高い丘に建物を建てる景色は、イエメンで見た風景と似ている。  
(郡司みさお)



2 モンゴル、トゥブ県バヤンウンジュール村 冬営地  
モンゴルの冬は厳しい。マイナス40度まで下がる。そのため、冬は山の南麓に営地をかまえる。日があたり、風を防いでくれるからだ。  
(児玉香菜子)



3 モロッコ、ティネリール  
湿り気のある枯川を畑にし、両脇はナツメヤシ栽培に利用している。  
さらに外側にある水気のない小高い土地は、住居地帯になる。  
(郡司みさお)



4 アルジェリア、イン・ベルベル・オアシス  
イン・ベルベル・オアシスの全景。住居域と農園域が明瞭に分かれているのは、地下水の利用形態と深く関係する。  
(石山 俊)



5 中国、新疆ウイグル自治区カシュガル市近郊村  
オアシス内のような。道路に沿いに植えられたポプラ並木は日よけ、風よけ、建築資材や燃料として使われる。  
(古澤 文)



## ● 研究員の着任について

アラムコ・片倉沙漠文化協賛金を受け、今後、財団が行う研究活動及び関連事業も多岐にわたることを勘案し、財団専任の研究員を採用することとなりました。

昨年2015年10月1日より、研究員として着任しました古澤文ともうします。これまでわたしは乾燥地域における農業の現代的変容について、地理学の観点から研究をしてきました。ごあいさつにあたり、その内容について少し紹介したいと思います。

対象としてきたのは中国の西北部に位置する新疆ウイグル自治区です。ここは年間平均降水量約150mmの乾燥地で、雨が非常に少ない地域ですが、アルタイ山脈、崑崙山脈、天山山脈といった4000~7000m級の高山から流れ出



新疆ウイグル自治区南部，アトシュの農村

す氷河のとけ水を利用して、ひとつとはオアシスにて灌漑農業をおこなってきました。こうした農業のあり方も、中国の社会的変化、急速な経済発展の影響を受けて変化しています。大規模な農地開発の結果、ここ半世紀で耕作面積・生産量は飛躍的にふえました。綿花はその代表的な作物で、中国国内総生産量の約40%を新疆産がしめています。日本の国土面積の約4倍という広大な土地と豊富な太陽エネルギーを利用した開発が進められてきた一方で、塩害など土地の荒廃、農業用水利用の増加など環境への負荷も高まっています。わたしは衛星画像を利用した土地利用の変遷を分析したり、観察や聞き取りを通じて実際の状況について理解し、今ある課題について考えています。

自分自身の研究テーマも引き続き遂行しつつ、財団で実施予定のサウジアラビア、ワーディ・ファーティマにおけるフォローアップ調査や各種事業において、これまで実施してきた研究手法や得られた知見などを活かしていければと思います。

(古澤文)

## 📅 活動報告

- 2015年12月3日  
第1回サロン開催：新疆ウイグル自治区における農業とその変容／古澤文
- 2016年2月27日  
第2回サロン開催：カザフスタンにおける農業開発と地域の変容／渡邊三津子
- 2016年3月15日～30日  
縄田代表理事、サウディアラビア、キング・ファイサル・センターほか訪問
- 2016年6月11日  
第3回サロン開催：2015年サウジアラビア事前調査報告／片倉邦雄、縄田浩志、河田尚子、郡司みさお、藤本悠子

## 📝 編集後記

財団のあらたな事業として、若手研究者・一般活動支援がはじまります。分野を問わず積極的な応募を期待すると共に、対象となる方が身近にいらっしゃいましたら、ぜひお知らせいただければと思います。また財団サロンへのご参加もおまちしています。

(古澤文)

## 📅 そのほかの報告

- 2016年5月28日  
鳥取大学乾燥地研究センターにて開催された日本沙漠学会第27回学術大会にて沙漠学会賞を受賞した吉川賢氏（岡山大学）に副賞として「片倉もとこ賞」（純銀製メダル）が授与されました。
- 2016年6月11日  
あらたに小河原正己氏が本財団の評議員に就任いたしました。



学会賞を受賞した吉川賢氏（中央）と渡邊理事（左）、石山理事（右）

## ✉ 片倉もとこ記念沙漠文化財団事務局

〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷2-21-1-610号室  
TEL: 03-6407-9873 FAX: 03-6407-9090  
Mail: office@moko-f.com Web: http://moko-f.com

片倉もとこ記念沙漠文化財団ニューズレター No.3  
Motoko Katakura Foundation for Desert Culture News Letter  
2016年6月29日発行  
編集：情報発信委員会（渡邊三津子・古澤文・藤本悠子）  
発行：片倉もとこ記念沙漠文化財団